

観光が注目される農村の社会的変化
—フィリピン・イフガオ州キアングン町ナガカダン村を事例にして—

Social Changes in a Rural Village that Has the Potential
for Becoming a Tourist Destination:
A Case of Nagakadan Village in Kiangon, Ifugao, Philippines

四本 幸夫*

要 旨

フィリピンのイフガオ州には4つの世界遺産の棚田がある。その内の1つはキアングン町のナガカダン村にある。観光地化が進んだバナウェとは異なり、この地域は観光開発を始めたばかりである。本稿ではこの地域の社会変動の要因を7つ挙げて、その過程を分析する。7つの要因とは：1. 教育、2. 宗教、3. 政府のシステム、4. 商業、5. 農業の実践、6. 人口移動、7. 観光、である。観光は最も新しい社会の変化をもたらすメカニズムであり、現在、町、農民、NGOが農民の生活向上を目指すコミュニティ・ベースド・ツーリズムを実践しながら地域の観光地化を目指している。具体的には、バナウェにおける無計画な観光発展による様々な弊害（景観破壊、農業の地位の低下など）を反面教師として、景観の保全や農業を基にした伝統文化の保持に繋がるエコツアーを催行している。しかし、このコミュニティ・ベースド・ツーリズムにも4つの課題が明らかになっている。すなわち、第一にNGOに依存してエコツアーが行われていて、主体者である農民が自立できていない現状。第二に農民が提供するサービスの質の問題。第三にエコ

* 立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部准教授

ツアーの仕事に参加でき、お金を稼げる農民が限定されている問題。第四にエコツアーからの収入が限定的で不安定であることである。これらの課題が克服されない限り、ナガカダン村の観光による社会の変化はバナウエのように様々な弊害を伴うものになる可能性がある。

Abstract

Ifugao Province in the Philippines has four rice terraces that are designated as world heritage sites. One of them is located in Nagakadan village, Kiangnan. In contrast to Banaue that has a well-developed tourism sector, this community has just started tourism development. In this article, I list seven factors that have led to social changes in this community and analyze the processes of those changes. The seven factors are as follows: (1) Education, (2) Religion, (3) Government systems, (4) Commerce, (5) Farming practices, (6) Migration, and (7) Tourism. Tourism is the most recent mechanism for social change. The municipality, farmers, and an NGO aim to develop the village as a tourist destination by promoting community-based tourism that aims to improve the lives of farmers. In particular, they conduct eco-tours that preserve the landscape and retain the traditional culture based on agriculture. This is a response to the various negative consequences of the unplanned development of the tourism sector that are observed in Banaue such as landscape destruction and the loss of the agricultural status. However, it is apparent that there exist four challenges even in community-based tourism. First, the implementation of eco-tours totally depends on the NGO that makes farmers dependent on tourism. Second, the quality of services provided by the farmers is low. Third, only a limited number of farmers can participate in eco-tours and earn money. Fourth, the earnings from eco-tours are

limited and unstable. If these challenges are not overcome, social changes as a result of tourism in Nagakadan village will be similar to the ones in Banaue that has experienced several negative consequences.

キーワード：社会変動、世界遺産、棚田、エコツアー、コミュニティ・ベースド・ツーリズム、キアンガン町ナガカダン村、イフガオ州、フィリピン

Key words : social change, World Heritage, rice terraces, eco-tour, community-based-tourism, Nagakadan Village in Kiangnan, Ifugao, Philippines

1. はじめに

フィリピンのイフガオ州（図1）にはユネスコの世界遺産に登録されている棚田が4つある。これらはフィリピンを代表する観光魅力の1つとなっており、多くの国内・国際観光客が訪問する。観光客は、美しい棚田景観とその景観を作り、守ってきたイフガオ族の伝統的な棚田文化に引かれてやってくる。伝統を重んじ自給的農業と質素な生活を営んできた農民たちに、観光の到来は様々な社会的変化をもたらしてきた。特に、イフガオ州で観光の中心となっているバナウェ町は貨幣経済が浸透し、その社会構造を大きく変化させてきており、もはや自給的農業と質素な生活を営んでいくのは難しい社会となっている。また、労働に対する認識の変化や家の建築様式の変化などにより、棚田景観にも変化をもたらしてきた（四本 2010）。以上のように、イフガオ州では観光は社会変動の大きな要因の1つと考えられる。

これまで、社会学では社会変動論の分野においては現代社会の特徴、特にその動的な変化を捉えようとしてきた。社会変動とは「社会構造と文化様式の時間を経た重要な変化」であり（Harper 1993）、この変動は循環的变化ではなく、趨勢的变化として考えられる（間々田 2000）。つまり社会を構成し

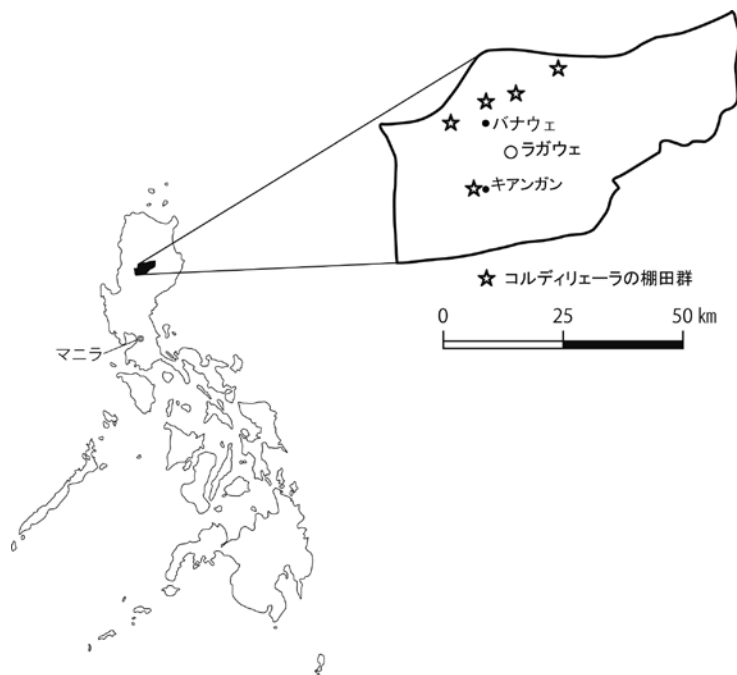


図1 フィリピン及びイフガオ州

ている物質的、観念的要素とその関連が大きく変化してしまうことで、それを理解しようとするのが社会変動論である。社会変動はトータルな社会を構成している政治、経済、教育、宗教、文化など社会の多様な側面で起こっているが、社会変動論の分野ではそれぞれの部分の分析で満足するのではなく、変動の全体を捉えようとする特徴を持っている。間々田（2000）によると、社会変動論の分析角度としては社会の方向性を論じる「趨勢論」、社会がどのような段階を経て変化するのかを明らかにする「段階論」、社会の変化がなぜ起こるのかという「要因（メカニズム）論」、社会の変化を進行の様子とその広がり注目する「過程論」、社会変動実現の主体に関して分析する「社会運動論」がある。ハーパー（1993）は社会変動論の分析レベルとしては、

小さくは小グループから組織、制度、社会（国家）と経て、大きくはグローバル社会までを紹介している。

本稿では、世界遺産に登録されている棚田を持つが、まだバナウエのように観光客が大量に押し寄せていないイフガオ州キアンガン町ナガカダン村に注目し、その社会変動についてみていく。ナガカダン村は農民が急速な変化を遂げて、もはや伝統に則った質素な生活とは言えなくなったバナウエの暮らしとは異なり、まだ、質素な生活を営んでいる部分を持っている。したがって、分析角度としては社会変動の要因と過程を分析するのが最も適しているケースといえよう。また、後で述べるが、この村で地域開発の一環としてエコツーリズムを推進している NGO と農業組合に関する記述は、社会運動の側面から社会変動を理解することに繋がる。分析のレベルとしては、主に地域社会（キアンガン町、ナガカダン村）と個人（農民）に焦点をあてる。

この調査におけるデータは、2011年8月8日から8月15日までの8日間の現地調査および文献（研究論文、政府刊行物）から成っている。現地調査では農民、イフガオ族のオーラル・ヒストリーの第一人者、キアンガン町の観光局職員、NGO の代表など13人に正式なインタビューをおこなった。また、町長、州の観光局職員、町の職員、農民、レストランのオーナー、雑貨屋のオーナー、トライシクル（三輪タクシー）の運転手などとのインフォーマルな会話も貴重なデータとなっている。

2. キアンガン町とナガカダン村の概要

（1）キアンガン町の概要

キアンガンはイフガオ州南西部に位置する町である（図2）。町の面積は20,419haで、東を州都のあるラガウェ町とラムート町、西をチノック町、北をフンドゥアン町、南をアシプロ町に囲まれていて、ラガウェとの境にはイブラオ川が流れている。山がちな地形で海拔500m から1500m にある

(Municipality of Kiangang 2009)。土地の傾斜を見てみると、町の面積の54.6%が31度以上の傾斜を持っている。平坦な土地が少ないため田畑は階段状の特徴のある風景をあらわす事になる。熱帯モンスーン気候で、1月から4月まで乾季があり、5月から12月までが雨季である。

2008年のキアングンの人口は16,294人、3,245世帯である。15のバラングイ(村)で構成されており、そのうち約半数が町の中心であるバラングイ・ポブラシオンという都市部に住み、残りの半分が田舎に住んでいる。ここ40年の人口動向を見ると、増加、減少、増加というパターンを示している(1970年15,123人、1980年17,481人、1990年21,329人、2000年14,099人、2008年16,294人)。州におけるキアングン町の人口割合を見ると1970年から90年までは14から16%だったのが、1990年代半ばから9%前後で推移している。人口で見ると州における町の存在力は低下している。

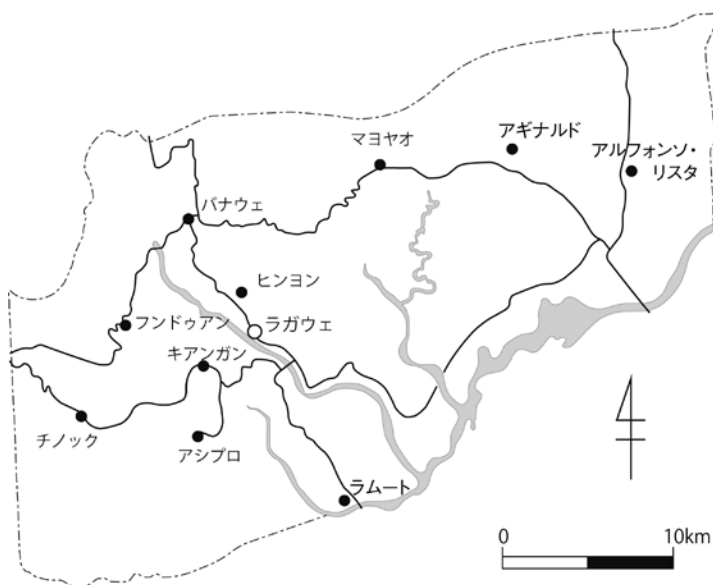


図2 イフガオ州の町

町における2008年の労働人口は4,380人で、その内の43%が女性であり、女性の役割が大きい。職業別で見ると公務員、会社の社長やマネージャーなどが157人、物理・数学・工学の専門家が328人、専門技術者が52人、事務員が67人、サービス労働者やショップ店員が280人、農民が2,783人、取引関連が132人、工場労働者が127人、未熟練労働者が336人、その他の労働者が116人となっており、職業分野は多様である。農民が全労働者の64%を占めていることから明らかなように、就業構造から見るとキアングンは農業の町であると言える。

(2) ナガカダン村の概要

ナガカダン村はキアングン町の15あるバラングアの1つで、町の中心のバラングイ・ポブラシオンの西に位置し境界を接している。村は、州にある5つの幹線道路の1つで、大半が舗装されているが未舗装の部分も残るポブラシオン-ナガカダン道路で繋がっており、ポブラシオンからトライシクルで約15分の距離にある。村の面積は897haで、その内、農地が376.27ha、森林が102.40ha、草地在399.44ha、住宅などのある開発地が19.00ha、道路が0.56haである。

ナガカダンの2009年の人口は813人、163世帯である。村には34の集落があり、少ないところは1世帯から多いところは21世帯の集落がある。ほとんどの住民が農業に従事している。農業以外での就業は限られていて、小学校教員と保育所の先生、もしくは村に4つあるサリサリストアの経営者になるぐらいである。2009年にはナガカダンの世帯の59.1%が貧困線以下¹⁾の生活をしている。また、食料線以下²⁾の収入の世帯は3.9%で、食料不足を経験している世帯はない。州の貧困線以下の世帯は2006年には30.9%であったが、2000年では55.1%であった。州としては6年間で急速に貧困層の割合を減らす事ができたが、ナガカダンでは貧困層の割合が高止まりしている (Local Government of Kiangon 2009)。2002年の月別家族収入の内訳は、3,000ペソ

以下が85家族、3,001ペソから6,000ペソが28家族、6,001ペソから7,800ペソが10家族、7,801ペソから10,000ペソが5家族、10,001ペソから13,600ペソが5家族、13,600ペソ以上が14家族となっており、低所得の家庭が多いが、収入の多い家庭も約10%いる (Municipality of Kiangon 2002)。

居住状態についてみると、当座しのぎの家に住んでいるのが2家族、スクオッターに住んでいるのが1家族ある。また、安全な水へのアクセスができない家庭が11世帯(7%)、トイレがない家庭が77世帯(47%)ある (Local Government of Kiangon 2009)。そして、2002年にはナガカダンの家庭の61.25%しか電気を引いていない。これには、電気が届かない場所に住んでいるか、電気が届いていても料金が払えないので引いていない場合とがある。

教育に関しては2009年、小学校の就学適齢期の内、30.2%が未就学で、高校の適齢期の内、52.3%が未就学である。未就学の理由は貧困もあるが、子供が勉強嫌いだという要因も大きい。これらのデータから、ナガカダン村は農村であるから、食料に関して困る事はないが、それ以外の部分での生活の質に関してはまだまだ低いといえる。

3. キアングンのオーラル・ヒストリアンの考える社会的変化

(1) マニユエル・デュラワン

キアングンには、マニユエル・デュラワン (Manuel Dulawan) というイフガオ族に関するオーラル・ヒストリアンの第一人者がいる。彼は76歳で、小学校の体育の教員を長年務めていたが、祖父母、両親やイフガオ族の長老の話を経験にとどめていて、イフガオ族の調査をしたベイヤー (Henry Otley Beyer)、バートン (Roy Franklin Barton)、キーシング (Felix M. Keesing) など文化人類学者の文献などにも精通している。デュラワン氏は、これまで文化芸術国家委員会 (The National Commission of Culture and Arts) から “Ifugao Oral Literature” と “The Ifugao” の2冊の本を出版し

ている。また、“Ifugao and the Ifugao” と “Ifugao : Socio-Cultural and Political History” の2冊を刊行予定である。未刊行のものには“Reading on Ifugao” や “An Ethnographic Mapping of the Ifugao Ethnolinguistic Subgroups” などがある (Cordillera Schools Group, Inc. 2003)。デュラワン氏はイフガオ族の文化の紹介のため1970年代に2回、1990年代に1回、来日したことがある。また、ヨーロッパを訪問した事もある。

イフガオ族の歴史や伝統文化などは口承により、また様々な伝統儀式を経験することにより人々の間に共有され継承されてきた。最近ではそれらが活字になって残されようとしているが、デュラワン氏はイフガオ族に継承されてきたこれらの知識を最も明快に、そして詳細に口承でき、また活字にできるオーラル・ヒストリアンである。

デュラワン氏によると、ナガカダンの人々が経験してきた大きな社会的変化は5つあるという。それらは、①教育、②宗教、③政府のシステム、④商業、⑤農業の実践、である。

ここではデュラワン氏の語りをもとにして文献、観察、農民へのインタビューからのデータを加えて5つの社会的変化を詳述する。

(2) 教育による社会的変化

かつて教育はフォーマルではなかった。すべての知識や知恵は年長の人から、また、コミュニティの活動に参加する中で身に着けていった。イフガオ族には文字がなかったので、民話や歌などを通して学んでいった。しかし、アメリカのフィリピン統治はフィリピンにおいてフォーマルな教育システムを構築していった。これはアメリカ社会への同化政策であり、教育用語はすべて英語となった (永野 2001)。イフガオでは教育の場で現地の言葉 (イフガオ語など) を使うことは禁止された。英語ができる事が重んじられ、英語の運用能力が社会的地位の向上と関係するようになった。英語ができることは役人、教員などの専門職につく必要条件であった。このようにして、教育

の普及と共にイフガオ語の地位は低下していった。

フォーマルな教育制度のおかげで、2007年には識字率はイフガオ州では88%、キアンガン町では92.66%になった。州のレベルでは41.47%の人が小学校³⁾を卒業し、25.81%の人がハイスクールを卒業、そして、8.9%の人が大学、大学院を卒業する。ナガカダン村には1つの小学校（ナガカダン小学校）ともう一つ、低学年だけの小学校がある。2010年、ナガカダン小学校には108人の児童が通う。6クラスあり、7人の教員が配置されている。このように、教育は人々に普及していったが、フォーマル教育の普及は伝統的な知識が失われていくことに繋がっている。フォーマル教育では西洋的教育、科学の重要性が強調され、伝統的文化や知識は軽視されてきた。

しかし、世界遺産の棚田が2001年に危機遺産リストに掲載されると、棚田を守るには伝統が重要であるという事が明らかになってきた。世界遺産の棚田はこれまでイフガオ族の伝統的な文化により維持されてきたので、イフガオ族の伝統文化を守り、継承していくことが棚田を守ることに繋がるとして、伝統文化の保持と継承の取り組みが最近おこなわれている。たとえば後述するシットモ（SITMo, The Save the Ifugao Terraces Movement）という地元のNGO団体は、日本ユネスコ協会連盟の援助のもと、世界遺産を守る活動として、2006年から『イフガオの棚田文化継承プロジェクト』を開始している。これは、3つのフェーズからなり、フェーズ1では、伝統的な知識を持っている人々を発見する。フェーズ2では発見された伝統的知識保持者を講師として、伝統的知識継承のためのクラスを実施する。更に、フェーズ3ではフォーマルな教育の場で伝統的知識を継承していこうという取り組みがなされている。具体的には伝統的知識に則った小学校向けの理科教材と大学の教員養成課程向けの教材を開発し、試験的に授業をおこなっている（日本ユネスコ協会連盟 年不詳）。このように、教育においてはフォーマルなシステムが伝統的知識の保持と継承にマイナスの影響を与えてきたが、最近それが見直されつつある。

(3) 宗教による社会的変化

イフガオ族の伝統的な宗教は、スペイン人の植民地支配によりキリスト教に取って代わられた。18世紀を通じてキリスト教の布教は軍事的な探検と歩調を合わせて進んでいった(野間 2008)。土着の宗教は悪魔の宗教で、この宗教を続けていくと地獄に行く、燃え盛る地獄に行くのだとさかんに説教された。人々は恐怖心からキリスト教に改宗した。改宗により人々はクリスチャンとなったが、その信仰は変容した信仰と儀式となり(Angiwan 1984)、キリスト教と土着の精霊崇拜が混じった形になっている。

伝統的なイフガオ族の宗教は多神教で、自然崇拜と先祖崇拜が混じったものである。ムンバキと呼ばれる土着の聖職者によりバキと言われる儀式体系が維持され、儀式が執り行われてきた。儀式は家族の利益の為、悪を避けるため、そして人々を特定の儀式に導く為に執り行われてきた(Cordillera Schools Group, Inc. 2003)。ムンバキはイフガオ族の伝統的知識保持者である。現在ではキアングン町の人口の74%がカトリック教徒、10%がプロテスタントのペンテコステ派、8%がプロテスタントの福音派であり、正確な統計はないが、人々の話を聞くと土着の宗教だけを信仰している人は非常に少ないと考えられる。ムンバキの儀式は伝統的なライフサイクルや棚田文化と密接な関係があるため、キリスト教への改宗は伝統の保持という観点から言えば否定的な影響を与えてきたと言える。

(4) 政府のシステムによる社会的変化

アメリカは当初、フィリピンを軍事力を用いて統治しようとした。しかし、アメリカは民政を敷き、友愛的同化政策(イレート他 2004)を推進していった。統治者は最初、アメリカ人であったが次第にフィリピン人に代わっていった。イフガオの人々もアメリカの統治に協力的になり、中央政府を受入れ、そのアメリカが導入した統治機構を学んでいった。

イフガオ族はスペイン人が来るまではフォーマルな統治システムは持って

いなかった (Barton 1919)。首長を持つ統治機構はなく、地域社会はその内部に構成された規範、その規範を遵守させる為の制裁により秩序が保たれていた。紛争解決では、年長で賢明であり、多くの場合カダンギユアン (富裕層) (kadangyan) に属する仲介者が活躍した。人々は仲介者に相談し、仲介者は助言をし、人々はそれに従った。このような伝統的なコミュニティの統治システムがスペイン、アメリカの影響で近代的な統治システムにとって変わられた。現在、地域を引っぱっているのは町 (ローカル・ガバメント) であり、町長を初めとする町の職員や、国の出先機関の職員たちである。また、これらの人々が地域のエリートであると認識されている。ナガカダン村を初めとする村々のリーダーは、選挙によって選ばれたバランガイ・キャプテンや評議員メンバーであり、村のリーダーは頻繁に町の庁舎に詣でる。英語ができ、フォーマルな教育を受け、キリスト教徒で、選挙で選ばれたり、専門的な知識を持ち公務員として採用されたりした人々がリーダーとなっている。こうして西洋からもたらされた統治システムは伝統的なリーダーの地位を低下させてきたのである。

(5) 商業による社会的変化

商業が発達する前、イフガオの村々ではコミュニティ内部で物々交換がなされてきた。たとえばタバコ1束は5束の米と交換された。村ではサトウキビも栽培していたが、サトウキビは搾って、煮て、固形にする。この固形のサトウキビをココナッツの殻に入れたものは米10束と交換された。スペイン統治時代になり、イフガオの人々はヌエバ・ビスカーヤやイサベラの低地の人々との交易を始めた。この低地との交易で珍重されたのが、高地ではなかなか生産できない塩と、綿が取れないので作るのが難しい衣服であった。この交易により低地の人々との交流ができ、イロカノ語を学ぶ人々も出てきた。イフガオ州の外との交易をする上では、イフガオ族よりも交易を発達させてきたイロカノ族が使うイロカノ語が話せる事は有利であった。

商業の発達、物々交換によって成り立っていたコミュニティに貨幣経済を浸透させていった。これは、農民に現金収入がないと暮らしていけない状況を作り出した。現在、キアンガン町の米に関しては自給自足⁴⁾であるが、それ以外の必需品は現金により購入しなくてはならない。そこで農民は現金収入を求めて、農業賃金労働者になったり、灌漑建設⁵⁾、道路工事などの土木作業に従事したりするようになった。なかでも土木作業は現金収入を得る重要な手段である。最近、キアンガン町では建物の建設や道路工事が増加しており、人手が足りない事もある⁶⁾。農作業で現金を得る為にはキノ州などの近隣の州まで出かける。バナウエと比較して観光開発が進んでいないナガカダンでは、バナウエで現金収入の重要な手段となっている木彫りのおみやげ作りはなされていない。したがって、農民の多くはバナウエのように観光が発展するとよいと考えている。

ナガカダンの農民は毎週土曜日になるとポブラシオンで開かれる市場に農作物を売りに行き、必要な物を買って帰る。土曜日の午前中、ナガカダン村に残っているのは老人と子供だけという状況になる。午後になると人々は市場で買った大きな荷物をかかえて急な農道を通って家路に着く。それは、缶詰などの食料、トタン、木材などの建築資材、灯油、電化製品などである。

(6) 農業の実践による社会的変化

ナガカダンでは伝統的に何世代にもわたり土地に適した米の品種の選択がおこなわれてきた。また、栽培には有機肥料が使われてきた。有機肥料はピンコルという実践により作られる(写真1)。ピンコルとは、土と藁、水草、シダなど棚田で腐っていく植物を集め山のように盛土したものであり、米を収穫した後、2ヶ月間放置しておく(UNESCO Bangkok 2008)。ピンコルにはサツマイモ、野菜、豆などを植える。これらを収穫したあと、ピンコルを崩して棚田に広げる。ピンコルは2ヶ月経つと肥料になっており、肥料になる間に野菜等が収穫できるという伝統的な農業実践である。この他、農業



写真1 ピンコル

実践には棚田の壁作り、盛土、米の種類の選択、雑草採りなどの先祖からの伝統があり、この伝統をもとに棚田が何世紀の間維持されてきた。

しかし、ナガカダンの農業実践は新しい品種と農業機械の導入により変化してきた。ピンコルをはじめとする伝統的な農業実践が、新しい品種の紹介により実践されなくなった。すなわち、1960年代にフィリピン農業省がミラクルライスという低地米を導入した。1980年代になると低地米はイフガオ州の各地で土着米に取って代わるようになった (Crisologo-Mendoza and Prill-Brett 2009)。低地米は土着米に比べて、多い収穫量が得られ、台風に強いという利点があった。土着米が年に1回しか収穫できないのに対して、低地米は2回収穫できる。しかし、二期作では農閑期がなくなり、2ヶ月を要するピンコルの実践ができなくなった。さらに、現在多く栽培されている低地米のC54という品種は農業と化学肥料を必要とする。これらの使用により棚田には魚がいなくなり、鳥も生き残ったのは2種類だけとなった。低地米の栽培は生物多様性喪失のほかに、農民の時間をも変化させていった。土着米の場合は一期作で、労働時間も少なく家族との時間が取れたが、二期作

の低地米は2倍以上の労働時間が必要となったため、家族との共有時間が少なくなった。米の新しい品種以外にも、農業省は黄金タニシなどをもたらした。黄金タニシは農民の食用として、つまりタンパク質の補給をするためにもたらされた。しかし、黄金タニシは繁殖力があり、米の若芽を食べる厄介な生物であった。米の若芽を食べない小さな土着のタニシは農薬などの影響もあって姿を消すに至った。

農業機械の導入も農民の生活に変化をもたらそうとしている（写真2）。ナガカダン村の水田は棚田のため役牛を入れることもなく、人力で耕作されてきたが、徐々にではあるが農業機械の導入が進められている。2009年当時、キアンガン町全体でハンドトラクターが2台、マイクロ耕運機が2台、動力噴霧機が2台、灌漑ポンプセットが5台、シュレッダーが1台しか保有されていなかったが（Province of Ifugao 2010）、今回の調査では、ナガカダン村の中のわずかな範囲で2台のハンドトラクターと動力脱穀機が観察されたことから、2009年より農業機械の普及は進んでいると考えられる。農業機械の導入は農民の厳しい労働を軽減させるため、農民は歓迎し、政府も農業の



写真2 ナガカダン村で使われている農業機械

機械化を推進している。しかし、これはこれまでで手でおこなわれてきた伝統的な農作業が変化することであり意識的に保存をしない限り農耕儀礼の変化をもたらす可能性がある。

4. 人口移動にともなう社会的変化

前章では、イフガオ族のオーラル・ヒストリーの第一人者が考えるナガカダン村における社会的変化を長期的な視点も含めて概観したが、この5つの変化に加えて、本稿では農民が経験する2つの社会的変化について見ることにする。本章では人口移動による社会的変化、次章では観光による社会的変化を見ていく。

(1) 人口の国内移動にともなう社会的変化

イフガオ州は2000年まで全国で81ある州の中で4番目に貧しく、州の家族の半分以上(55.7%)が貧困層とみなされたが、2003年以降急速に改善され、2006年には30.9%まで貧困率は低下した。しかし、フィリピン全体の貧困率である26.9%よりも高い。農業が主体の産業構造、貧困という状況が、これまで州からの人口流出を生んできた。1985年から1990年の5年間に4,161人が州外に流出したが、コルディリエラ行政地域の中心都市であるバギオが位置するベンゲット州に851人、マニラ首都圏に142人、カガヤンバレー地域にあるイサベラ州に820人、ヌエバ・ビスカーヤ州に1,181人、キリノ州に657人となっている。ベンゲット州とマニラ首都圏への流出は田舎から都市への人口移動であり、都市部での農業以外の就業機会を求めての流出と考えられる。しかし、カガヤンバレー地域の3つの州への人口流出はよりよい農業を求めての人口流出である。カガヤンバレーはコルディリエラ山脈とシエラマドレ山脈に挟まれた地域で農業が盛んである。イサベラ州は灌漑された土地で機械化が進み、米ととうもろこしの栽培が行われている一大農業

州であり、キリノ州、ヌエバ・ビスカーヤ州も同様に米ととうもろこしが栽培されている。イフガオ州の棚田と違い、広い土地で栽培できるので、生産性が高い。2010年、米の生産価値を価格で表して、フィリピンを16に分けた地域別でその割合を比較すると、コリディリエーラ行政地域は2.47%で、カガヤンバレー地域はセントラル・ルソン地域の19.40%に次ぐ10.98%の生産を誇っている（Bureau of Agricultural Statistics, Republic of the Philippines 2011）。

ナガカダン村の多くの農民がキリノ州やイサペーラ州により多くの農業収入を求めて移り住んでいった。典型的な移動のプロセスとしては、まず、男性が先にキリノ州などへ行き、働いて貯金する。ある程度将来の目処が立つてから、家族を呼び寄せるといふ。貯めたお金は農地の購入に当て、将来的には自作農になるのが目標である。ナガカダンを含むイフガオ州では農地が限られており、農地は非常に高く、低地の5倍の値段である（熊野 2007）。また、ナガカダンの農地は棚田なので重労働である。さらに、長子相続が基本であるため、農地を相続しなかった兄弟姉妹が農業を続けようとすれば小作人か低賃金の農業労働者として働くしかない。これらが押し出し要因となり、キリノ州などの平坦で広く生産性が高い農地の魅力が引っ張り要因となって、ナガカダンの農民は村外流出してきたのである。

ナガカダンに農地を持っている多くの農民は農業労働者としてキリノ州に出稼ぎに行くことも多い。土着米の栽培の場合、一期作であり田植えや収穫を終えた後は時間ができる。かつては男性もその空いた時間は子供の世話をしたりしていたが、今は現金収入を求めて二期作で低地米を栽培しているキリノ州に行くのである。キアンガン町に住んでいる地元有力者の中にはキリノ州に農地を購入している人たちもいる。この人たちは小作人や農業賃金労働者を雇って農業をおこなっている。また、多くのキアンガン町周辺の農民がキリノ州に移っているので、ナガカダンとキリノ州の労働ネットワークが構築されており、キリノ州に働きに行くのはそれほど大きな決断を要するも

のではない。

(2) 人口の国際移動にともなう社会的変化

フィリピンは、海外への出稼ぎ労働者送り出し国としてよく知られているが、ナガカダン村でも海外出稼ぎ労働がみられ、そのことが同村住民の生活の質に大きな影響を与えている。海外に住んでいるフィリピン人は永住、一時的、不法滞在を含めて、2009年859万人おり、フィリピンへの送金は173億米ドルにのぼる (Philippine Overseas Employment Administration 2010)。フィリピンでは海外にいる家族からの送金により新しく家を建てたり、テレビやDVD プレーヤーを買ったりする家庭もある。しかし、海外からの送金は家の建築や電化製品の購入だけではなく、ビジネスを始める資金にもなる。マッケイ (2003) はキアンガンの南にあるアシプロ町にあるハリアップ村とパヌブタン村における調査で女性の海外出稼ぎ労働者の送金が夫などの家族により投資され村の風景が変貌していくことを述べている。送金により夫が服の仕立屋、木彫り職人、タイヤ修理屋などの商売を始めたり、サリサリストア、トライシクルやジブニーの経営者を目指したりする。また、農業では商品作物に投資する。商業野菜は観光客や都市部のエリート層に需要があり、コリディリエラ地域では生産する農家が増えている (Lewis 1992)。海外出稼ぎ労働者からの送金はアシプロでは緑豆の栽培に投資され、農地の風景が変化していった (McKay 2003)。ナガカダン村でも海外出稼ぎ労働者の送金はビジネス立ち上げの資金になっている。村の63歳の女性農民には73歳の夫と5人の子供がいる。小作農として暮らしてきたが、現在2人の娘が海外に居住し、送金してくれている。34歳の娘は家政婦としてロシアに住み、27歳の娘は香港で家政婦をしている。娘からの送金により、小作農という出自であるがナガカダン村にある4つのサリサリストアの内の1つを営むことができるようになった。村人にとって海外出稼ぎ労働者が家族に1人もいることは、小作人からの脱出、ビジネスの立ち上げ、電化製品の購入な

ど生活の向上に向けてのチャンスが広がることを意味している。

5. 観光による社会的変化

(1) 最近のイフガオ州の観光動向

イフガオ州への観光客は、2003年には32,993人の国内観光客、7,312人の国際観光客と合わせて40,305人に過ぎなかったが、2009年には52,855人の国内観光客、48,442人の国際観光客を受け入れ、合計で101,297人に増加している。その経済効果は著しく、2009年、観光客が来たことにより22,020人分の雇用が創出され、金額に換算すると633,106,250ペソ（1ペソ＝約2円）の経済的効果になる。2003年の国内観光客と国際観光客の比率はおよそ8対2であったが、2009年にはその割合は大体5対5となっている。

観光客の増加にともなって宿泊施設の数もイフガオ州では増加している（表1）。2006年に宿泊施設のある町はバナウエ、キアンガン、マヨヤオ、フンドゥアン、ラムート、ラガウエ、チノック、アルフォンソ・リスタであった。2010年にはアギナルドに1軒ロッジができており、州の11町のうち9町に宿泊施設が存在するまでになった。2006年、州には49の宿泊施設があったが、2010年には59施設に増加している（Province of Ifugao 2010）。宿泊施設の多くがバナウエに集中しているが（2006年には24軒）、2006から2010年にかけてバナウエの宿泊施設の数に変化はなかったため、州全体に占める比率は低下した。また、ホームステイが2006年に8軒あったが、2010年には6軒に減少している（Province of Ifugao 2006；2010）。

観光客の増加はイフガオ州の町や村に均一に影響を与えているのではなく、バナウエに集中している。2006年の町別の観光客の受入状況を見ると、バナウエが85%、フンドゥアンが7%、キアンガンが6%⁷⁾、ラガウエが1%、マヨヤオが1%となっている（UNESCO Bangkok 2008）。しかし、2006年以降の宿泊施設の地域的な広がりを見ると、バナウエ以外の町への入込客数

表1 イフガオ州の宿泊施設数(2006年・2010年)

町/年	2006年	2010年
バナウエ	ホテル1 イン・ロジ22 ペンション1	ホテル1 イン・ロジ23
キアンガン	イン・ロジ4 ホームステイ4	イン・ロジ5 ホームステイ4
マヨヤオ	イン・ロジ4 ホームステイ3	イン・ロジ5 ホームステイ1
フンドゥアン	イン・ロジ1 ホームステイ1	イン・ロジ3 ホームステイ1
ラムート	イン・ロジ2	イン・ロジ4
ラガウエ	イン・ロジ4	イン・ロジ7
チノック	イン・ロジ1	イン・ロジ3
アルフォンソ・リスタ	イン・ロジ1	イン・ロジ1
アギナルド	イン・ロジ1	
合計	49	59

(出典) Province of Ifugao. 2006、2010より。

の増加が期待される。

(2) キアンガンの観光

キアンガンの観光資源には3つのタイプがある。自然観光資源、歴史的観光資源、文化的観光資源の3つである。自然観光資源にはカプガン山(写真3)、パンガガワン山の洞窟、バグニット滝などがある。これらの資源は主に冒険観光やトレッキングを目的とする観光客に向いている。歴史的観光資源は第二次世界大戦時の日本との戦争に関するもので、フィリピン駐留の日本陸軍第14方面軍司令官山下奉文大将が連合軍に降伏した際の木造の建物(写真4)、日本軍と戦い勝利を勝ち取る途上で亡くなったフィリピンとアメリカ軍の兵士をしのんで建てられたキアンガン戦争記念塔などがある。これらの観光資源にはこれまで日本から戦没者遺族が訪れていたが、戦後66年が経ち遺族も高齢化しているため、その数が減っている。文化的観光資源にはイフガオ族の伝統的な道具などを集めたイフガオ博物館、ユネスコの世界遺



写真3 カプガン山（自然観光資源）



写真4 山下奉文大将降伏の地資料館（歴史的観光資源）



写真5 ナガカダン村の棚田

産に登録されているナガカダン棚田(写真5)、バエ棚田などがある。このようなイフガオ族の文化と景観に魅力を感じてやってくる観光客は、州政府や町が想定する最も一般的な観光客である。

キアンガン町はバナウエのように交通が発達していない。マニラからの長距離バスはバナウエまでは直通が通っているが、キアンガンに行くにはラガウエで降りてトライシクルで約20分ガタガタ道を走らないといけない。キアンガン行きのトライシクルを探すのも容易ではなく、誰かに尋ねないとわからない。また、棚田の景観を楽しんで満足する観光客は、バナウエの棚田を見ることで十分その目的を果たすことができる。同じような棚田をわざわざ時間をかけて見に来ることは少ないであろう。したがって、ナガカダンはバックパッカーや随行員のいる団体などで、農業体験やトレッキングに興味のある観光客層に限られる。

町として観光に力を入れるようになったのはここ5～6年ぐらいのことである。しかし、観光振興は始まったばかりで、観光統計もとられていない。したがって、実際に何人の観光客が来ているか把握できていない。筆者が

2011年8月の8日間キアンガンに滞在していた間、1人の観光客も見かけなかった。町の観光担当職員によると現在、15人ぐらいの団体が月に2～3団体ぐらいやってくる。来ない月もあるので、団体観光客は年間300～500人ぐらいであろうという。

(3) シットモの活動

キアンガンが町として観光に力を入れ始めた背景には、NGO 団体のシットモの活動がある。シットモは Save The Ifugao Terraces Movement (SITMo)、すなわち、「イフガオ族の棚田を救う運動」団体のことである。2000年にフィリピンで最も古い NGO であるフィリピン農村再建運動 (Philippine Rural Reconstruction Movement) により着手された農村地域開発プログラム (The Rural District Development Program) からの援助により創設された。シットモは先住民の伝統遺産の保護を目指しており、主にイフガオ族の棚田の維持に力を入れている。ナガカダンには約241haの棚田があり、97箇所、14.5haが破壊されている (Calderon, et.al. 2008)。一般的に棚田には地域の歴史、文化、伝統が蓄積されており、一度破壊されるとその回復は困難であると考えられている (吉川 2006)。シットモは2002年にフィリピン証券取引委員会 (Security and Exchange Commission) に登録されている。メンバーは5つの団体 (農民グループ、サステイナブル・エナジーグループなど) とほとんどがフィリピン人の個人メンバー (約100名) から構成されている。これまで、シットモは貧しい農民にも電気が届くように水を利用した小型の発電機を集落にもたらしたり、IK (Indigenous Knowledge) プログラム (日本ユネスコ協会連盟の援助による) という長老などが持っている伝統的な知識を若い世代に伝える活動を行ったりしてきた。前町長とはあまり折り合いが良くなかったが、現町長とは良い関係が築けており、役場の隣の食堂で町の観光担当職員とキアンガンの観光開発について議論を重ねており⁸⁾、町とシットモには協調関係が構築されている。

シットモの活動において、棚田の維持に関する取り組みで重要なプロジェクトはエコツアーである。これは、シットモが2つの村の棚田で農民が農業周期を守ることを要求する特別な条例を作ることを推し進めたことと関連する。というのは低地米の伝播は農業周期を狂わしてきたからである(Acabado 2010)。この条例は収穫祭の復活をもたらし、少数ながらフィリピン人観光客を呼び込む契機となった(Guimbatan and Baguilat Jr. 2006)。このような観光気運萌芽の中で、2005年から始まったエコツアーはこれまで観光が棚田を維持してきた農民に何の利益ももたらさなかったことから、農民を受益対象として開発されたツアーである。このツアーは伝統的な農業周期である田植え、収穫、その他の農作業に合わせて計画されたツアーで、観光客は土着米の周期に合わせて農作業が体験でき、儀式にも参加することができる。ここでいう、農業周期(米の周期)とは、土着米の栽培の周期である一期作のことであり、イフガオ州の農家に広がっている低地米の二期作の周期ではない。第4節でも述べたが、低地米の栽培には様々な問題が起こっており、伝統に則った栽培方法の方が棚田の維持には向いていることがわかってきている。また、イフガオ族にとって米とそれを生産する手段はイフガオ社会の中で中心的な位置を占めてきた(Brosius 1988)。それゆえに、イフガオ族の文化は米の栽培と深く関係して、土着米の栽培の維持が文化の維持と観光資源としての棚田の保持にもつながる。

ところで、シットモの2008年のボトク・アド・キアングンというナガカダン村を中心としたツアーはどのような内容からなっているのか以下に紹介してみる。ボトクとは収穫期のことであり、7月、8月の収穫期に合わせてツアーが実施される。2泊3日のツアーの費用は1人4,100ペソである。この費用には州内の交通費、食事、2日間の宿泊費、ツアーガイド料、文化夜祭り参加、環境維持費、入場料等が含まれる。旅程は以下のようになっている(表2)。

このツアーの中心はナガカダン村ベイニナン集落における土着米の収穫体

表2 ナガカダン村におけるツアー（ボトク・アド・キアンガン）の内容

1日目

午前7時～8時	バナウエ町到着
午前8時～9時半	バナウエ民族村およびパインフォーレスト・リゾート チェックイン 朝食 休憩
午前9時半～10時	旅の説明
午前10時～12時	フンドゥアン町ハバオへ移動 ハバオ棚田見学
午後12時～1時	昼食
午後1時～3時	バナウエ町へ移動
午後3時～5時	バナウエ・ビューポイント訪問（バナウエの棚田見学）
午後5時～7時	休憩
午後7時～8時	夕食バナウエ民族村およびパインフォーレスト・リゾート泊

2日目

午前7時～8時	朝食
午前8時～10時	キアンガン町中心部へ移動 シットモの寮もしくはホームステイ先 チェックイン
午前10時～11時	徒歩でナガカダン村のベイニナン集落へ移動
午前11時～12時	休憩
午後12時～1時	昼食
午後1時～4時	ボトク（収穫）の体験
午後4時～5時	キアンガン町中心部に戻る
午後5時～7時	休憩
午後7時～8時	夕食
午後8時～10時	文化夜祭キアンガン泊

3日目

午前7時～8時	朝食
午前8時～10時	キアンガン町のツアー 山下奉文大将降伏の地 キアンガン戦争記念塔 イフガオ博物館
午前10時～11時	ジューロンガン村アワ集落へ移動（棚田がある）
午前11時～12時	バグニット滝へハイキング
午後12時～2時	バグニット滝でのピクニック
午後2時～3時	アワ集落へ戻る
午後3時～4時	キアンガンへ戻る
午後4時～6時	休憩
午後6時	マニラへ出発

験と、この収穫に関する儀式（踊りや歌）などを鑑賞する文化夜祭である。このツアーを通して、シットモは農民に収入をもたらし、伝統文化と棚田の維持を目指している。しかし、キアンガン町だけでは観光客を満足させるのは難しいと考え、バナウエ町とフンドゥアン町も旅程に組み込んでいる。シットモのツアーでは、伝統文化の保持とオーセンティシティ（須藤・遠藤 2005）という観点から農業周期に合った儀式が重視されている。基本的には観光客が来るのに合わせて、農業周期から外れた儀式を披露する事は避けられる。これによって、儀式のオーセンティシティはかろうじて維持されるが、結果として、観光客の人数に限られることにもなっている。

（４）キアンガンの農民と観光

筆者がかつて調査を行ったバナウエでは、観光の発展がその観光資源を維持してきた農民に農業を通して直接的な利益をもたらすことはなかった（四本 2010）。むしろバナウエの農民は農業を副業化して、木彫りの民芸品などのお土産作りやホテルの清掃業務という観光関連の仕事に就くことにより利益がもたらされている。このような状況に対してバナウエの農民は組合を結成して、アメリカのフェアトレード NGO の協力の元、観光からもたらされるイフガオのブランド力を利用して土着米の販売から利益を得るプロジェクトを実行してきた。この取り組みにより耕作放棄された棚田に農民が戻って来ているという報告がなされている（Domoguen 2007）。

キアンガン町のナガカダン村でも、これまで観光化の進展と農民たちの利益獲得とが繋がっていなかった。しかし、シットモの援助により観光を利用して農民が利益を得ることができるよう取り組みが進んでいる。ここでもフェアトレードは重要な概念で、シットモと連携している韓国のフェアトレード・ツーリズム団体を通して、韓国人の団体観光客がやってくるようになった。

シットモと連携してエコツアープログラムに参画する農民はベイニナン農

業組合（Bayninan Farmers Association）のメンバーでもある。ベイニナンはナガカダン村にある集落の1つである。ベイニナン農業組合はシットモの援助の下、2004年に農民自身により組織された。同年、フィリピン労働雇用省（Department of Labor & Employment）に、また、2009年にフィリピン証券取引委員会に登録されている。組合結成は農民の生活の向上にとって不可欠の要素である。町やシットモが援助したくても、登録された組織でないと NGO も行政も援助ができない。「組織がない所、援助なし」である。

現在、会員数は65名で、ベイニナンの農民のほか、ナガカダンで育ち、教員などの専門職につき、定年を迎えた人も少数だが会員として存在する。組合の目的は組合員の農業を助けて生活を良くすることである。生活改善のためにはより多くの収入を得ることと、農業の方法を向上させることが重要とされる。これらの目的を達成するのにエコツアーは重要な役割を担う。2005年から組合のメンバーは観光に参加するようになった。まず収入の面では、エコツアーがあるとシットモから組合に対して、トレッキング・ガイドと踊りの要請があり、組合に一括で賃金が支払われる。踊りの披露では、団体客に対して農業周期にかかわる伝統的な踊りなどが上演される。この踊りは組合が2011年から提供するようになった。これは組合長が提案して始められたもので、政府の方針で町が勧めるイフガオ文化推進プログラムの一環として踊りが上演されているあるツアーでは15人の農民が踊りに参加し、1人当たり250ペソの収入を得た。

また、シットモのエコツアーにはナガカダンでのトレッキング・ツアーが組まれる場合があるが、その時は、町の職員や農民がガイドをする。大体観光客5人に対して1人のガイドをつけるようにしている。団体客が高齢者や小学生の場合にはガイドの数が増える。たとえば韓国から9歳から12歳までの団体客が来たときには、トレッキングで急な斜面を歩くので、安全のために1人に1人のガイドがついて、手を繋いで歩いたこともある。ガイドをすれば農民は500ペソ稼ぐことができる。しかし、町の職員に対しては1,000ペ

ソ支払われる。ガイドの質を向上させるために、シットモと連携して町が主催するツアーガイド育成ワークショップが何回か行われ、このワークショップでは観光倫理とマナー（服装や笑顔の重要性）が教えられている。

農法の向上に関してはバイニナン農業組合が土着米の栽培を奨励している。デュラワンの指摘にもあるように、近代農業の導入は多くの弊害を生み、棚田の荒廃に繋がってきた。従って伝統を保持することができ、環境にもやさしい土着米の栽培とそれを奨励するエコツアー・プログラムへの参加は組合の目的に合致する。

（5）ナガカダンのエコツアーの課題

ナガカダン村で現在行われているエコツアーにはいくつかの課題がある。一つ目にシットモに依存してエコツアーが行われている現状があげられる。集客、旅程作成、宿泊と交通の手配などすべてがシットモにより行われている。いずれは農民自身でエコツアーを催行することが目標にされているが、農民にはそれを行う設備やノウハウがない。この NGO から農民への事業の継承は懸念されている課題であるが、まだ手がつけられていない状況である。

二つ目に、このシットモへの依存体質と関連する事だが、農民が提供するサービスの質の問題がある。たとえば、農民自身が観光客に食事を提供したいという希望があるが、キアンガン町の食堂で提供される食事⁹⁾と比べてもさらに貧しいものとなる。また、農民自身でホームステイ・サービスをおこないたいという希望もある。しかし、水道や観光客が使えるようなレベルのトイレがないなどの問題があり、具体的なことは何も進んでいない。まずは資金集めから始めようという段階である。

三つ目にエコツアー・プログラムの仕事に参加でき、お金を稼げる農民が限定されていることである。2009年、ナガカダン村の人口813人のうち261人が同村の雇用人口であるが、バイニナン農業組合の会員はその約4分の1の65人である。さらに、組合員のうちエコツアーの仕事に参加できるのは通常

役員を含む7～8名程度であり、参加要請の声がかかるのは、英語がある程度できて、観光客をもてなすことができる人々に限られる。しかし、これらの能力以上に重要なのが役員との良好な関係である。また、声がかかるかどうかはどこに住んでいるかということも関係する。組合はバイニナン集落の農民が結成したものであるが、町とNGOが観光開発に深く関わっている事から、町の条例でバイニナンだけではなく、ボログ集落、バトゲン集落など、村内の他集落の農民も参加できることになっている。しかし、下ナガカダンと呼ばれるバイニナンと上ナガカダンと呼ばれるこれらの集落とは区別され、上ナガカダンのメンバーにはほとんど声がかからない。たとえば、上ナガカダンのある農民は英語がある程度できて、ガイドをしたいという希望があるが、これまで一度も声がかかったことがない。参加できない上ナガカダンのメンバーは、なぜ選ばれないのか疑問を持っている。また、組合員には100ペソの入会金と年4回の定例会、緊急集会への参加が義務付けられている。集会に遅刻すると20ペソの罰金、欠席すると150ペソの罰金が課される。しかし、これらの出費や責任に対しての見返りが上ナガカダンのメンバーにはまだない。エコツアーがあれば組合自体にも収入が入り、預金されるが、そのお金がなぜメンバーに分配されないのかという不満が選ばれないメンバーに起こることになる。これに関しては、今のところ組合長に問い合わせても明確な返答が返ってこない。

四つ目の課題は、エコツアーからの収入が限定的で不安定であるということである。ナガカダンの農民はこれまで観光とは縁のない生活をしてきた。しかし、エコツアーによって観光収入が入るようになったが、年間に300～500人のグループしか訪れず、しかも、毎月観光客が来るわけではない。たとえば2011年は8月までの時点で、団体観光客が来たのは1月と2月、6月～8月であった。3～5月の3ヶ月間における観光収入はなかった。また、ナガカダン村およびキアンガン町ではバナウェ町のような掃除人を雇うようなホテル、ロッジはなく、観光客相手の木彫りの仕事もない¹⁰⁾。したがって、

現時点では観光からの収入は多くの農民の生活を向上させるまでには至っていない。

6. おわりに

本稿では、フィリピンのイフガオ州キアンガン村における社会変動に影響を及ぼしてきたと考えられる7つの要因とその過程について述べてきた。これらの要因のうち、4つの要因（教育、宗教、政府のシステム、商業）は主に植民地時代に導入されたものであり、これらによりナガカダン村は昔の伝統的な社会からは大きく変貌してしまった。それ以外の3つの要因（農業の実践、人口移動、観光）は新しい要因であり、どちらかというところから大きく社会を変貌させていくものである。これら3つの新しい要因の中で農業の実践と観光には伝統への回帰という要素が含まれている。農業の実践では低地米の栽培と機械化という合理主義に根ざした変化が進行している。一方で、低地米栽培の弊害に気付き、土着米に戻ろうとする動きがある。観光ではエコツアーが催行され、その観光資源として農業周期に則った伝統文化が重要視されるようになった。観光における社会変動実現の主体はNGO（シットモ）、町（観光課）、村、農民（ベイニナン農業組合）であり、観光業者は加わっていない。従って利益追求型ではなく、地域の発展を目指すことが基本となっている。ここに挙げた7つの要因の中で、観光が一番新しい要因であり、バナウエのように無計画に観光発展が起こり、様々な矛盾を引き起こしてきたことを教訓として、計画性のある観光開発が目指されている¹¹⁾。この観光における伝統への希求は教育にも影響を与えており、シットモは伝統文化や知識をフォーマルな教育現場で伝えるプロジェクトを始めている。観光がこれから発展していけば、人口移動にも影響を与えるだろう。人口流出が抑えられ、耕作放棄地に農民が戻ってくる可能性がある。このように最も新しい社会変動のメカニズムである観光は他の要因にも影響を与えるが、その変化が農民にとって良いものになるかどうかは、ひとえに社会変動実現

の主体であるシットモ、町、村、農民たち自身の行動にかかっているといえよう。

参考文献

日本語文献

- イレート、レイナルド、ピセンテ・ラファエル、フロロ・C・キブイエン（2004）『フィリピン歴史研究と植民地言説』東京：めこん。
- 熊野 建（2007）「イフガオ族における農耕儀礼と土着化したフィエスター儀礼的遊びの文化復興を中心に―」『関西大学東西学術研究所紀要』40：79-106。
- 須藤廣・遠藤英樹（2005）『観光社会学：ツーリズム研究の冒険的試み』東京：明石書店。
- 永野善子（2001）「アメリカ時代：恩恵的同化の呪縛」大野拓司、寺田勇文（編著）『現代フィリピンを知るための60章』東京：明石書店、43-46。
- 日本ユネスコ協会連盟「世界遺産を守る世界遺産活動：活動報告フィリピン」
<http://www.unesco.or.jp/isan/result/pj/phl/>（2011年11月28日閲覧）
- 野間晴雄（2008）「フィリピン・コルディリエラ山脈の棚田と遺産ツーリズムの課題―世界文化遺産としての文化的背景と地域社会―」『関西大学東西学術研究所紀要』41：103-136。
- 間々田孝夫（2003）「社会変動」『社会学の理論』碓井崧・丸山哲央・大野道邦・橋本和幸（編）、東京：有斐閣。
- 吉川日出男（2006）「棚田（景観）の保護」『札幌学院法学』22（2）：207-231。
- 四本幸夫（2010）「観光発展と変化する生活様式―フィリピン・イフガオ州バナウエの世界遺産の棚田群における事例―」江口信清、藤巻正己（編著）『貧困の超克とツーリズム』東京：明石書店、325-370。

英語文献

- Acabado, Stephen B. (2010) *The Archeology of the Ifugao Agricultural Terraces: Antiquity and Social Organization*. Dissertation, University of Hawaii.
- Angiwan, Matias Sr. (1984) *Mayaoyao Social Institution, Customs and Practices*. Master of Arts in Education, Thesis. Baguio Colleges Foundation Baguio City, the Philippines.
- Barton, Roy Franklin (1919) 'Ifugao Law,' *American Archaeology and Ethnology* XV: 5.
- Brosius, J. Peter (1988) 'Significance and Social Being in Ifugao Agricultural Production,' *Ethnology* 27(1) : 97-110.
- Bureau of Agricultural Statistics, Republic of the Philippines (2011) *2008-2010 Regional Agricultural Production Accounts*. Quezon ity, Philippines.

- Calderon, Margaret M. et al. (2008) *Toward the Development of a Sustainable Financing Mechanism for the onservation of the Ifugao Rice Terraces*. Singapore: Economy and Environment Program for Southeast Asia (EEPSEA).
- Cordillera Schools Group, Inc (2003) *Ethnography of the Major Ethnolinguistic Groups in the Cordillera*. Quezon City, Philippines: New Day Publishers.
- Crisologo-Mendoza, Lorelei and June Prill-Brett (2009) 'Communal Land Management in the Cordillera Region of the Philippines,' in *Land and Cultural Survival: The Communal Land Rights of Indigenous Peoples in Asia*, edited by Jayantha Perera, Metro Manila, Philippines: Asian Development Bank
- Domoguen, Robert L. (2007) 'Uplifting the Multi-functional Roles of the Rice Terraces,' *Zig-Zag Weekly*, April 15.
- Guimbatan, Rachel and Teddy Baguilat Jr. (2006) 'Misunderstanding the Notion of Conservation in the Philippine Rice Terraces: Cultural Landscapes,' *International Social Science Journal*, Vol. 58, Issue 187, 59-67.
- Harper, Charles L. (1993) *Exploring Social Change, Second Edition*. New Jersey, USA: Prentice Hall.
- Lewis, Martin W. (1992) 'Agricultural Regions in the Philippine Cordillera,' *Geographical Review* 82(1) : 29-42.
- Local Government of Kiangang (2009) *Barangay Nagakadan, Kiangang, Ifugao: Barangay Socioeconomic Profile & Development Plan*. Kiangang, Ifugao.
- McKay, Deirdre (2003) 'Cultivating New Local Futures: Remittance Economies and Land-use Patterns in Ifugao, Philippines,' *Journal of Southeast Asian Studies* 34(2) : 285-306.
- Municipality of Kiangang (2002) *Socio-Economic Profile-2002-: Municipality of Kiangang, Province of Ifugao*. Kiangang, Ifugao.
- (2009) *Municipal Rice Self Sufficiency Road Map: Kiangang, Ifugao*. Kiangang, Ifugao.
- National Statistical Coordination Board (2007) *FAQs on the Official Poverty Statistics of the Philippines*, Makati City, Philippines.
- Philippine Overseas Employment Administration, Department of Labor and mployment, Republic of the Philippines (2010) *Overseas Employment Statistics 2010*, Mandaluyong City, Philippines.
- (2010) *Overseas Filipino Remittances*, Mandaluyong City, Philippines.
- Province of Ifugao (2006) *Ifugao Tourism Situationer*. Province of Ifugao.
- (2010) *Socio-Economic and Ecological Profile: Province of Ifugao Year 2010*, Provincial Planning and Development Office.

UNESCO Bangkok (2008) *Impact: The Effects of Tourism on Culture and the Environment in Asia and the Pacific: Sustainable Tourism and the Preservation of the World Heritage Site of the Ifugao Rice Terraces Philippines*, UNESCO Bangkok.

注

- 1) 貧困線以下とは家族または個人が基本的な食料と食料以外に必要なものを手に入れる最低限の収入を得られない状態をさす (National Statistical Coordination Board 2007)。
- 2) 食料線以下とは家族または個人が基本的な食料の必要性、つまり、経済的に必要な、また、社会的に望ましい身体的活動をするための栄養を満たすのに必要な食料を買う収入が得られない状態をさす (National Statistical Coordination Board 2007)。
- 3) フィリピンの教育は、小学校が6年間の無償義務教育、4年間の中等教育 (ハイスクール)、そして通常4年間の大学教育から成り立っている。大学の就学年数は専門の分野では、たとえば看護学や工学などは5年、医学は6年となっている。また、大学院教育もおこなわれている。
- 4) 2010年のキアンガン町における米の自給率は114.04%である (Municipality of Kiangnan 2009)。
- 5) ナガカダン村のある例では灌漑設備の建設は政府によって発注される。同建設に従事する者の雇用条件は、昼1時間の休憩を含み朝7時から5時まで1日中働いて日給250ペソ (約500円) である。なお、給与は労働終了後2週間しないと支給されない。
- 6) 特に、米の田植えや収穫の時期には、農民は農作業を優先するので人手が足りなくなる。キアンガンの農民はバナウエの農民と異なり、農業をまだ主要な職業と考えている。一方で、バナウエの農民、特に小作農は農業を副業のようにとらえている。
- 7) この数字は州レベルの統計である。この数字からバナウエに観光客が集中しているということが理解できれば十分である。なぜなら、正確な数はわからないからである。キアンガン町の観光担当職員は統計を取っていないので観光客の数はわからないといていた。
- 8) シットモの最高経営責任者と町の観光担当職員は、共にイフガオ族で少数民族割り当て枠によりフィリピン大学ディリマン校に入った校友である。
- 9) キアンガン町のレストランは観光客に提供できるようなレベルではない。2つ食堂があるが、衛生面で問題があり、また、食事内容も限られている。他には、バーベキューとハンバーガーの屋台があるぐらいである。慣れない観光客が比較的安心して食べられるファーストフード・レストランはイフガオ州には一軒もない。
- 10) キアンガン町には観光各相手に木彫りや織物を売る店は1つしかない。それは、シットモの最高経営責任者が将来の観光発展を見越してサイドビジネスとして開いている店で、キアンガンではお土産作りをしていないので、商品は近隣の町や村から仕入れ

ている。シットモの連れて来る団体の観光客以外はあまり来ないので、いつもは地元住民にアイスクリームを売る店として知られている。

- 11) ナガカダン村では棚田にバナウエのような景観破壊のコンクリートやバラックの家々が乱立しないように、棚田に家を建てることを禁止する条例を施行している。